

マーケット概況（2022年10月）

10月の債券相場は、前月末に公表された国債買入れの四半期予定において、10年超の2区分で買入オペのオファー額が倍増となったことを好感して買い先行で始まり、低調な9月米国ISM製造業景況感指数を受けて債券先物12月限は149円20銭まで上伸した。4日の10年債入札は、指値オペ水準の0.250%を背に波乱なく通過したが、9月米国雇用統計を筆頭に複数の良好な経済指標を背景に米国債の金利上昇が進み、米国10年債利回りが4.0%を超える水準となると本邦債券相場も反落した。12日の30年債入札が軟調な結果となると、超長期債の金利上昇が進行してイールドカーブはスティープした。その後も世界的な金融引き締めが意識されて、為替相場で1ドル=150円を超える水準まで円安ドル高が進むと、債券先物12月限は147円38銭まで下落し、5年154回債は2015年6月以来の0.140%を付けた。為替介入が実施され1ドル=145円台まで急伸すると債券先物12月限は反転したが、超長期債の金利上昇は継続し、25日に20年182回債は2015年2月以来の1.315%、30年76回債は2014年9月以来の1.685%を付けた。しかし、警戒感の強かった15.5年～39年の流動性供給入札が無難な結果となり、超長期ゾーンの買入れオペが増額されると超長期債主導で買い戻され、10年368回債は0.245%で今月の取引を終えた

<短国市場>

3Mは先月の地合いを引き継いで-0.220%でスタートしたが月末には担保需要の剥落で-0.13%台に上昇した。7日の3MTDB1113回債は在庫を抱えながらの入札となり最高落札利回りは-0.15%台となった。14日の3MTDB1114回債、21日の3MTDB1116回債が-0.13%台と投資家目線で消化されたことから、セカンダリー市場は需給良好となり-0.16%台～-0.17%台で推移したが、月末にかけては投資家需要が一巡し-0.13%台となった。6M、1Yは投資家需要が細く、いずれも前場の実勢を上回る低調な入札だった。6日の6MTDB1112回債は-0.15%台、19日の1YTDB1115回債は-0.10%台で着地し、それぞれ-0.16%台、-0.11%台まで伸びたが、月末にかけて6Mは-0.14%台まで売りに押される地合いとなって終えた。

<一般債市場>

10年地方債は前月比+7.0bp ワイド化し国債カーブ+20.0bp、5年地方債は前月比同水準の同+9.0bpで条件決定した。10年国債の逆イールドや先行き不透明感から予約の入りはやや遅く、消化に時間を要するものもあった。既発債は、長期超長期ゾーンへの投資家の慎重な運用姿勢が継続しスプレッド調整を余儀なくされた。社債は起債環境が悪化する中、発行額は前年同月比7,658億円減少し1兆3,169億円となった。SDGs債関連では、住友金属鉱山、東急リアル・エステート投資法人、四国電力、山口フィナンシャルグループ、森永乳業がグリーンボンドを、首都高速道路がソーシャルボンドを、KDDIがサステナビリティボンドを、いずれも発行体として初めて起債した。

◎ 主要債券月間四本値

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#368	0.245(4日)	0.235(28日)	0.255(19日)	0.245(31日)
#367	0.240(3日)	0.225(4日)	0.245(20日)	0.235(28日)
#357	0.200(3日)	0.160(5日)	0.245(20日)	0.195(31日)
#153-#154(5Y)	0.055(3日)	0.035(4日)	0.140(21日)	0.075(31日)
#181-#182(20Y)	0.960(3日)	0.935(5日)	1.315(25日)	1.050(31日)
#1106-#1112 TDB(6M)	-0.180(6日)	-0.180(6日)	-0.161(14日)	-0.161(14日)
#1111-#1117 TDB(3M)	-0.220(7日)	-0.220(7日)	-0.135(27日)	-0.1375(27日)